

## 27Q-pm060

帝京大学薬学部1年次科目「コミュニケーション演習1」の有用性評価(1)―学生の患者イメージおよび高齢者イメージの変化に関する解析―

○渡邊 真知子<sup>1</sup>,丸山 桂司<sup>1</sup>,下平 秀夫<sup>1</sup>,唐澤 健<sup>1</sup>,戸原 明<sup>1</sup>,小佐野 博史<sup>1</sup>,  
栗原 順一<sup>1</sup>,井上 圭三<sup>1</sup>(<sup>1</sup>帝京大薬)

【目的】帝京大学薬学部では、6年制薬学教育の年次進行型医療人教育として、各学年に「コミュニケーション演習」を導入している。今回、1年生で実施した模擬患者（医療面接 OSCE）および高齢者（介護施設での実習）とのコミュニケーション体験について、学生の患者イメージおよび高齢者イメージに及ぼす影響を指標としてその有用性を検討した。【方法】平成20年入学1年生334名に対し、以下、患者との信頼関係の築き方（講義およびロールプレイ形式の実習：90分×4）、介護施設における実習の事前学習（実習先の職員による講義：90分×2、「高齢者の行動と生理」：SGDおよびビデオ90分×2）、模擬患者との医療面接 OSCE、実習（特別養護老人施設または老人保健施設において半日間）、事後学習（90分×1）の順で行った。患者イメージは本演習開始前と OSCE 終了直後に15形容詞、高齢者イメージは本演習開始前と施設での実習直後に20形容詞対について、それぞれ5段階の評定尺度で調査した。【結果・考察】演習前の学生の患者イメージに対して、「希望する職業」および「病院に行った記憶」の有無などの因子が影響を及ぼした。OSCE 終了後では、患者イメージ15項目中13項目においてプラスのイメージへの有意な変化が認められた。一方、高齢者イメージに対しては、演習前の調査では「高齢者と接する機会」の有無が有意な影響を及ぼしたが、介護施設での実習後にはその差は認められなくなり、さらに、20項目中14項目においてプラスのイメージへ有意に変化した。本結果は、模擬患者や実際の高齢者と接する機会を体験することが患者イメージおよび高齢者イメージに対して良好な影響をもたらし、その後のコミュニケーションを円滑にする可能性を示唆するものである。従って、本演習科目は早期体験学習としても有用ではないかと考えられた。